

# 中国の空母は米空母の3ないし4分の1の実力 中国は米空母との戦力格差を埋められるか？！

樋口 譲次

## ○米中の空母には「3~4対1」の戦力格差

中国海軍の「山東」空母打撃群は、今年7月9日（火）から18日（木）までの10日間、西太平洋（フィリピン海）で機動展開訓練を行った。

統合幕僚監部のプレス・リリースによると、海上自衛隊（海自）の護衛艦がその活動の終始を通じて警戒監視・情報収集に当った。また、航空自衛隊の戦闘機が艦載戦闘機に対し緊急発進するなどの対応を行った。

海自の警戒監視・情報収集の結果を分析すると、米国と中国の空母には、いまだに大きな戦力格差があることが明らかだ。

当該訓練期間に、中国海軍の空母「山東」の艦載戦闘機及び艦載ヘリによる発着艦について、7月9日（火）から15日（月）及び17日（水）から18日（木）までの間に確認された実績は計420回であった。（なお、16日の情報収集の結果が説明されていない理由については明らかにされていない。）

今回、海自の護衛艦が警戒監視した10日間のうち9日間で戦闘機の出撃回数は計260回で、1日平均28.8回だった。

昨年（2023年）10月と11月に「山東」空母打撃群が西太平洋（フィリピン海）に機動展開した際、12日間の訓練期間で戦闘機の出撃回数は計420回で、1日平均35回だった。

これを踏まえると、空母「山東」からの艦載戦闘機の出撃回数は、1日平均概ね30回から多くても40回程度とみることができよう。

一方、米空母（主力はニミッツ級）の1日出撃回数は、概ね120回程度といわれている。

空母の真価は、まさに艦載機の攻撃能力に掛かっており、1日出撃回数だけから見ても、米中の空母には「3~4対1」の戦力格差が見て取れる。

そこで、米中の空母の能力について、その要点を比較してみることにする。

## ○米中の空母には未だ大きな戦力格差あり

### <隻数・スペック等>

米海軍は、現在、ニミッツ級 10 隻、ジェラルド・フォード級 1 隻、計 11 隻の空母を保有している。

ニミッツ級は、排水量 7.4 万トン以上、原子力（原子炉 2 基搭載）推進、蒸気式カタパルトを採用し、艦載機約 70 機（最大 90 機）を搭載できる。

ジェラルド・フォード級は、さらに大きく、排水量 10 万トン以上で、時速 200 キロ以上に急加速できる電磁式カタパルトを採用し、艦載機 75 機以上を搭載できる。

一方、中国海軍は、現在、空母「遼寧」と「山東」の 2 隻を保有し、3 隻目の「福建」を建造中である。

「遼寧」は、旧ソ連の空母「ワリヤグ」を改造したもので、排水量 5.8 万トン以上、ディーゼル機関推進、スキージャンプ方式を採用し、艦載機 24 機（J-15）を搭載できる。

「山東」は、初の国産空母で、排水量 6.6 万トン以上、ディーゼル機関推進、スキージャンプ方式を採用し、艦載機 36 機を搭載できる。

「福建」は、2 隻目の国産空母（中国 3 隻目の空母）として建造中であったが、2022 年 6 月に上海で進水し、今年 5 月に初回の試験航行を行った。同空母の試験航行には、少なくとも 1 年間が必要と見られている。

この空母は、排水量 8 万トン以上で、J-15 戦闘機や KJ-600 固定翼早期警戒機などを運用可能な電磁式カタパルトを装備しており、艦載機 60～70 機の搭載が可能という。

なお、中国には、将来的に原子力空母の建造計画が存在するとの指摘があるが、その実現には、10 年単位の期間が必要と見られる。

### <運用・戦闘力など>

米国採用の電磁式カタパルトと中国のスキージャンプ方式には、大きな機能上の差がある。

艦載機の最大発艦重量は、ニミッツ級が 45 トン、山東が 28 トンほどでニミッツ級に比べ約 40%少ない。そのため、燃料や武装を減らす必要があり、作戦半径が短くなり、戦闘力も低下する。さらに、「遼寧」や「山東」は早期警戒機や電子戦機などの搭載も困難である。

1 日の出撃回数（ソーティ）は、前述の通り、ニミッツ級が 120 回ほど、「山東」が 30 から 40 回程度で、3 ないし 4 分の 1 の能力である。

また、作戦期間は、原子力推進のニミッツ級が燃料補給なしで数年間、ディーゼル機関推進の「山東」が自艦の燃料で航行可能な期間は 15 日ほどと見られ、

それ以上の運用には補給艦の随伴が不可欠である。

このように、米空母 11 隻に対し、中国空母は建造中を含め 3 隻に過ぎず、規模的に劣勢である。また、排水量や動力源、艦載機の射出方式、艦載機数などのスペック面で、米中には大きな開きがある。

そのため、運用のスケール・柔軟性や戦闘力にも大きな差を生じ、総じて、米中の空母力には大きな戦闘力格差の存在を指摘せざるを得ない状況である。

### ○中国は世界中に展開できる米空母力に対抗できるか

各国の海軍艦艇は、実任務と補給整備及び教育訓練の 3 分野でローテーション運用されているといわれている。

米海軍協会 (USNI) ニュース (7 月 8 日付) によると、現在、空母ジョージ・ワシントンは、母港である日本の横須賀に向け太平洋を航行中である。

カール・ビンソンは、ハワイ諸島及び同周辺海空域等で行われている環太平洋合同演習 (RIMPAC2024、2024 年 6 月 27 日～8 月 2 日) に参加中である。

ロナルド・レーガンは東太平洋の第 3 艦隊の海域で、ニミッツは太平洋西北部で、それぞれ活動中である。

欧州では、ドワイト・D・アイゼンハワー空母打撃群が地中海で行動中である。

海軍の運用常識に従うと、現在、空母 3 隻保有の中国は、1 隻を実任務に割り当てるのが精一杯ではなかろうか。しかも、中国海軍、中でも空母は実戦経験が全くなく、西太平洋 (フィリピン海) や東・南シナ海での諸活動も、運用試験や訓練・演習の域を出ていないのではないかと推察される。

米海軍は、地球の表面の 3 分の 2 以上を占めるグローバル・コモンズとして世界の海洋において、アメリカの戦力を陸上に投射し、あるいは世界中のアメリカの利益を守るため、米軍事力を機動と作戦の手段に変える能力をアメリカに与える役割を期待されている。

そのため、米海軍は、世界の海洋を利用する能力、そして他国が米国の利益に反する行動をとるために世界の海洋を利用することを否定する能力を持つことを目標に造成されている。その中心が、空母機動打撃群である。

前述の通り、中国は、将来的に原子力空母の建造計画が存在すると指摘されているが、果たして、世界の海洋で、米国に対抗できる海軍力、中でも空母機動打撃群を造成できるかどうかについては、大きな疑問を呈することが出来るのではなかろうか。